

# 老舎研究会会報 第19号

胡絮青女士 題字

## 晨光出版公司与老舎

倉橋 幸彦

かなり前のことになるが、杉本達夫先生から、筆者に一つの宿題を仰せつかった。

老舎『火葬』1944年5月刊の出版社が、『老舎文学詞典』でも、張桂興さんの年譜でも甘海嵐さんの年譜でも、「晨光出版公司」となっているのですが、44年5月に晨光出版社がそもそも存在したのでしょうか。後に晨光が上海で再版した際、44年の出版を「渝出版」と書いているため、あたかも44年に存在したかのごとくに扱われているのであって、実際はまだ存在せず、別の出版社から出ているのではないか。ひょっとして、45年4月の「黄河書局版」を誤って44年5月と書いたのではないか。

ところで、ここで杉本先生が仰っている「晨光出版公司」と言えば、実は老舎とは深い縁で結ばれた出版社であった。

ここでは、この晨光出版会社の創業縁起について簡単に触れることにより、長い間打ち棄っておいた杉本先生の疑問にいくらかなりとも答えることにしたい。

さて、晨光出版会社の発足について語るため

には、まずは『良友文学叢書』（良友文学図書公司、後に良友復興図書公司と改称）の編集人としてその名を知られた趙家璧さんに登場していただかねばならない。

趙家璧は、疎開先の重慶より1945年の末に上海に戻るものの、良友図書公司株主の内紛に巻き込まれ進退窮まることになる。

そんな中、翌年2月15日にアメリカへの出発を目前に控えた老舎が上海にやってきた。

趙家璧は、さっそく重慶ですでに知己の間柄にあった老舎のところに自分の窮状を相談しに向かっている。2月19日のことであった。

相談を受けた老舎は、趙家璧に「新しい看板」を掲げることを進言すると共に、資金の援助をも申し出る。老舎としては、その時すでに自信作『駱駝祥子』がアメリカで出版されベスト・セラーになっていること、またハリウッドでそれが映画化される計画があるという消息も得ており、お金の心積もりがあつてのことであろう。

こうして老舎の精神と金銭両面での援助をとりつけた趙家璧は、3月5日に老舎のアメリカ行きを見送った後、自身も金策に奔走し、上海に新興出版社が一つ誕生することになった。これが晨光出版公司である。

なお、張澤賢著『書之五葉 民國版本知見録』（上海遠東出版社、2005年1月）では、この晨光出版会社の誕生を「1947年6月」（p.189）とする。しかし、手元にある「晨光文学叢書」（第一次出版）の『惶惑 四世同堂第一部』上・下と『偷生 四世同堂第二部』上・下は共に、奥付には、「1946年11月初版」とある。

晨光出版会社の創業年を確定するにはさらに詳細な調査を要するが、上で取り上げた杉本先生の「44年5月に晨光出版社がそもそも存在したでしょうか」という一つの疑問にはとりあえず答えを出すことができたようである。

では、杉本先生が指摘されるように、何故『火葬』の44年5月の初版が「晨光出版公司」から出版されたとこれまで誤解されてきたのであろうか。

これも杉本先生が推測されるように、『火葬』[晨光文学叢書第23種]奥付にある「1944年重慶本初版/1948年5月晨光初版」という版表示に惑わされてのことであろうか。ただし、発行月の「5月」については、晨光初版『火葬』の奥付からは判明しない。

趙家璧の回想によると、「重慶で出版された「土紙本」は「字跡模糊不清」であった(「老舎和我」、『文壇故旧録 編集憶旧録』[生活・讀書・新知三聯書店、1991年6月]所収)とのことであるが、これについての詳細は今後の研究に俟つほかない。ここでは参考までに、筆者が架蔵する新豊出版公司発行の『火葬』について簡単に触れておこう。

中華民国35(1946)年11月、「滬」つまり上海再版、発行部数1000冊(滬初版は「中華民国35年1月、発行部数は「2000(玄1003)〔☆これが何を意味するかは不明〕冊)。214頁、定価の記載はない。出版元の新豊出版公司の住所は、上海六馬路14号。因みに、この新豊出版公司からは、やはり同年の民国35年2月に老舎の短編集『東海巴山集』(2000冊、196頁)が出版されている。因みついでにいうと、同書には表紙のデザインが違う二種が存在する。

また、「四川分發行所」として「自生書店(重慶商業場西3街)」を記す。奥付には「有著作權/不准翻印」とも印す。

ところで、やはり民国38(1949)年4月発行の『駱駝祥子』[晨光文学叢書第32種]奥付には

「民國28年11月重慶初版」とあるが、この版についても詳細は現在のところ不明である。ただし、1951年2月再版の同じく晨光版『駱駝祥子』の奥付には、上の初版の表示に続けて「1950年5月晨光本初版」とあることなどからすると、晨光本の奥付はあまりあてにはならないとも言えるのであるが。

とまれ、老舎著作の版本に関してはまだまだ多くの謎が残されていることだけは事実である。

ここで話をもう一度晨光出版公司に戻す。

先にも述べたように、創業年については不明ながら、その当初の地は哈爾濱路258号にあったようである。後には何度かその所在を移しているが、現在判明している住所だけを晨光文学叢書を手がかりにして以下に記しておく。

四川中路215号 → 福州路漢彌登大厦246、256号 → 江西中路170号256室 → 南京東路34号229-231室

さて、晨光出版公司については老舎との関わりからしてもまだ語り尽くせていないが、それについては別の機会に譲ることにして、ここでは最後にもう一つ、晨光出版公司に纏わる逸話を、上に引いた張澤賢著『書之五葉 民國版本知見録』から紹介しておこう。

先ず下の写真をご覧あれ。「どこかで見たおぼえのある<sup>デザイン</sup>図柄だなあ」と思いの方も多いのではないか。晨光文学叢書を一冊でもお持ちの方なら、すぐにこれが晨光出版公司の<sup>トレードマーク</sup>「出版標記」であることを言い当てることができるはずだ。



この図柄の設計者は、晨光出版公司創業当時、上海美術界にその名を馳せた大物の一人、龐薰蕪(1906年生まれ、号は鼓軒、江蘇省常熟の人)であ

る。龐は、唐朝の煉瓦に刻まれた一幅の鶏の図を題材にし、この図柄を完成した。張澤賢は、龐によるこの意匠を説明して、「金鶏報曉(雄鶏が夜明けを告げる)」を描くことにより、「限りなく美しい晨光は旭日が東に昇る時に出現すること」を喩えたと説明している。

ところが、この目出度き絵柄が、後に趙家璧と龐薰栻の二人にひどい災いをもたらすことになるのである。

文革時に、趙家璧から押収した資料の中から、龐薰栻の名と彼の「金鶏」の意匠が発見される。そして、その意匠の「金鶏」の羽の部分に「US」の二文字を無理矢理読み取った御仁がいたのである。おもわず「ウソ(US)」と叫びたくなるような話であるが、老舍同様に「美国帝国主義者の手先」としての二人のその後の処遇については大方の予想ができるのではないだろうか。

「金鶏」が文字通り、「免罪の標識」として認められるのに十年の年月が費やされることになる。

## 『老舍全集』所収「駱駝祥子」校読(1)

小生 常談

老舍生誕百周年(1999年)最大の贈り物が19巻本『老舍全集』(人民文学出版社)であることに異論を挟む人はいないはずだ。

ただし、この『老舍全集』の校訂は極めて“粗疏”であることは、張桂興の指摘する通りである。

そうでなければ、張氏による632頁にも及ぶ大部の『《老舍全集》補正』[老舍研究叢書](中国国際広播出版社、2001年12月)が出現することもなかった。同書の詳細については杉

本達夫「張桂興編『《老舍全集》補正』の意義」(本会報第16号、2002年7月26日)を参照していただきたい(なお張桂興については、日下恒夫「膨大と細心の「老張的治学—張桂興《老舍研究叢書》を吹聴する—」本会報第15号、2001年7月27日も参照)。

ここでは、この張桂興『《老舍全集》補正』に倣い、『老舍全集(第3巻)』(1999年1月)所収「駱駝祥子」の“校読”を通じて、『全集』版が老舍の代表作の一つである「駱駝祥子」として信頼に値する版であるのかを検討してみたい。

以下には、『老舍全集(第3巻)』所収「駱駝祥子」(【全集】と略す)と初版本の人間書屋版の異同を示すが、人間書屋版は初版(民国28年3月)ではなく民国29年11月出版の第4版(定価国幣1元2角、発行人人間書屋(上海福煦路687弄30号、発行者陶亢徳、【人間】と略す)を用いたことをお断りしておく。

### [第1章]

①【全集】年紀在四十以上，二十以下的，恐怕就不易在前两派里有个地位了。

(第3頁倒1行)

【人間】年紀在四十以上，廿以下的，恐怕就不易在前兩派裏有個地位了。

(第2頁正2行)

[按語]：【全集】では、すべての「廿」を上のように「二十」と表記するが、これは人民文学出版社版『駱駝祥子』(1955年1月北京第1版、以下【人民】と略す)に基づく。なお、【全集】における以下の「廿」→「二十」の書きかえの例は略す。

②【全集】他确乎有点像一棵树，坚壮，沉默，而又有生气。

(第7頁倒9行)

【人間】他確乎有點像棵樹，堅壯，  
沈默，而又有生氣。  
(第6頁倒2行)

[按語]：數詞「一」の挿入は、【人民】  
に基づく。

③【全集】他的腿长步大，腰里非常的稳，跑  
起来没有多少响声，步步都有些  
伸缩，车把不动，使座儿觉到安  
全，舒服。(第9頁正3行)

【人間】他的腿長步大，腰裏非常的穩，  
跑起來沒有多少響聲，步步似乎  
有些伸縮，車把不動，使座兒覺  
到安全，舒服。(第8頁倒3行)

[按語]：「似乎」→「都」の書きか  
えは、【人民】に基づく。

④【全集】不错，他确是咬了牙，但是到了一  
年半他并没还上那个愿。  
(第9頁倒3行)

【人間】不錯，他確是咬了牙，但是到了一  
年半他並沒還上那個誓願。  
(第9頁倒1行)

[按語]：「誓願」→「愿」は、【人民】  
に基づく。

⑤【全集】恰巧有有辆刚打好的车(定作而没  
钱取货的)跟他所期望的车差不甚  
多；……。 (第10頁倒3行)

【人間】恰巧有輛剛打好的車——定作而  
沒錢取貨的——跟他所期望的車  
差不甚多；……。 (第11頁正4行)

[按語]：「——……——」→「(……)」  
は、【人民】に基づく。

〈注〉：なお、「民謡」→「民歌」や  
「擱忽」→「扇乎」等表記の規範に  
関するものは採らなかった。

[第2章]

①【全集】他不大关心战争怎样的毁坏田地，也

不大注意春雨的有无。  
(第14頁倒8行)

【人間】他不大關心戰爭怎樣的毀壞農地，  
也不大注意春雨的有無。  
(第15頁正6行)

[按語]：「農地」→「田地」は、晨光出  
版公司版『駱駝祥子』〔晨光文  
學叢書第32種〕(民國38年4月  
初版、以下【晨光】と略す)に  
基づく。

②【全集】设若城里的人对于一切都没有办法，  
他们可会造谣言——有时完全无中  
生有，有时把一分真事说成十分  
——以便显出他们并不愚傻与不作  
事。(第14頁倒1行)

【人間】設若城裏的人對於一切都沒有辦  
法，他們會造謠言——有時完全  
無中生有，有時把一分真事說成  
十分——以便顯出他並不愚傻與  
不作事。(第15頁倒4行)

[按語]：副詞「可」の挿入は、【人民】  
に基づく。

③【全集】他们自己可是不会跑，因为腿脚被  
钱蹙的太沉重。(第15頁正13行)

【人間】他們自己可是不會跑，因為腿腳  
被錢蹙的太沈重。  
(第16頁正6行)

[按語]：「蹙」→「蹙」は、【人民】  
に基づく。

なお、【晨光】は、「……，  
因為腿腳被錢蹙太的沈重。」  
とするが、これは明らかな誤  
植。

④【全集】谣言已经有十来天了，东西已都  
涨了价，可是战事似乎还在老远，  
一时半会儿不会打到北平来。  
(第15頁倒10行)

【人間】謠言已經有十來天了，東西已都

漲了價，可是戰事似乎是在老遠，一時半會兒不會打到北平來。(第16頁倒5行)

[按語]：「是」→「还」は【人民】に基づく。因みに、【晨光】は上の「戰事」を「戰爭」とする。

⑤【全集】“有上清华的没有？嗨，清华！”(第15頁倒1行)

【人間】『有上清華的没有？嘿，清華！』(第17頁正2行)

[按語]：「嘿」→「嗨」は、【人民】に基づく。

⑥【全集】光头也看不出不妙，可是还笑着说：(第16頁倒6行)

【人間】光頭子也看不出不妙，可是還笑着說。(第18頁正3行)

[按語]：「光頭子」→「光头」は【人民】に基づく。

⑧【全集】过去的成功全算白饶，他得重鼓另开张打头儿来！(第17頁倒4行)

【人間】過去的成功全算白饒，他得從打鼓另開張打頭兒來！(第19頁倒4行)

[按語]：「從打鼓另開張」→「重打鼓另開張」は、【人民】に基づく。

⑨【全集】万一兵们再退回乱山里去，他就是逃出兵的手掌，也还有饿死的危险。(第18頁倒3行)

【人間】萬一兵們再退回亂山裏去，他就是逃出兵的手，也還有餓死的危險。(第21頁正2行)

[按語]：「手」→「手掌」は、【人民】に基づく。

〈注〉：なお、「牠」→「它」・「稜縫」→「稜縫」・「餒／餓」→「喂」等表記の規範に関するものは採らなかった。

[第3章]

①【全集】骆驼——在口内负重贯了的——是走不快的。(第21頁倒10行)

【人間】駱駝——在口內載重慣了的——是走不快的。(第23倒3行)

[按語]：「載重」→「负重」は、【人民】に基づく。

②【全集】率性不去管地上了，眼往平里看，脚擦着地走。(第23頁正13行)

【人間】爽性不去管地上了，眼往平地看，脚擦着地走。(第26頁5行)

[按語]：「平地」→「平里」は、【人民】に基づく。

③【全集】星星渐稀，天上罩着一层似云又似雾的灰气，暗淡，可是比以前高起许多去。(第25頁倒2行)

【人間】星們漸稀，天上罩着一層似雲又似霧的灰氣，暗淡，可是比以前高起許多去。(第29頁倒4行)

[按語]：「星們」→「星星」は、【人民】に基づく。

④【全集】正是牲口脱毛的时候，骆驼身上都已经露出那灰红的皮，只有东一缕西一块的挂着些零散的，没力量的，随时可以脱掉的长毛，像些兽中的庞大的乞丐。(第26頁正6行)

⑥【人間】正是牲口脫毛的時候，駱駝身上已經都露出那灰紅的皮，只有東一縷西一塊的掛着些零散的，沒力量的，隨時可以脫掉的長毛，像些獸中龐大的乞丐。(第30頁正4行)

[按語]：「，」の削除は、【人民】に基づく。

⑦【全集】“色！色！色！”祥子叫骆驼们跪下；对于调动骆驼的口号，他只晓得“色……”是表示跪下；……。(第28頁正5行)

【人間】『色！色！色！』祥子叫駱駝們跪下；對於調動駱駝的口號，他只曉『色，色，』是表示跪下；……。  
(第32頁倒3行)

[按語]：「色，色，」→「色……」は、  
【人民】に基づく。

⑧【全集】老者很同情祥子，而且放了心，这不是偷出来的；……。(第30頁正3行)

【人間】老者很同情於祥子，而且放了心，这不是偷出来的；……。  
(第35頁倒3行)

[按語]：「於」の削除は、【人民】に基づく。

(注)：なお、「恍惚」→「恍惚」・  
「悪夢」→「噩夢」等表記の規範に  
関するものは採らなかった。

## 老舎関係文献略目 (8)

倉橋 幸彦 (編)

【2002年下半期・補】

緒方 昭「老舎の小説と戯曲創作の変遷 —  
抗戦・建国期を中心に —」  
『國學院雑誌』第103巻第11号  
(11月15日) p. 172-184

◆はじめに／一、抗戦期；濟南脱出・「文協」の活動・戯曲、曲藝の創作／二、建国期；十年筆墨（「自由と作家」）・『正旗〔★紅〕旗下』執筆前後／おわりに

\*「中国の社会主義建設の過程は、建国初期の一時期が経過すると、路線をめぐる論争が権力闘争の様相を呈し、文芸政策に度々強い引き締めが行われるようになった。その頃から老舎の筆は次第に政治課題から離れ、民族、伝統、歴史を扱う方向へと移り、ついに、戯曲から小説

創作へ回帰する。そして、長篇歴史小説『正紅旗下』の執筆で旗幟鮮明な創作活動を展開し、建国以来の文芸政策に無言の抵抗を示そうとした。」(p. 183)

【2003年上半期】

高井潔司「体験的“中国語のすすめ” — 挫折  
と反省の日々」

『トンシュエ』第25号

(同学社、2月15日) p. 4-6

\*「もう一つ鮮明に覚えているのは、紛争の最中、大学〔☆東京外国語大学中国語学科〕祭で中国語劇「駱駝祥子」に出た時のことだ。私の役回りは端役も端役。せりふはたった一つ。最初のせりふ合わせで祥子の女房役の先輩が大笑いして言った。／「高井君、それって中国語。／以来、私の中国語はフリーズしたままなのかも知れない。でも連日、徹夜の稽古に付き合っていたら、池上正治監督（現中国問題研究家）から褒められた。／「島影！、高井はひと言のせりふのために徹夜している。お前らもっと気を入れてやれ」／というわけで、新聞社〔☆読売新聞社〕では中国語専攻など自ら言わないように潜んでいた。だが、中国の改革・開放路線の推進に伴い、中国特派員に引っ張り出されて、挙句に中国語教師まで務める羽目になってしまった。」(p. 5)

杉本達夫「老舎の死をめぐる断想 — II —」

『早稲田大学大学院文学研究科紀要』  
第48輯 第2分冊 (2月28日)  
p. 199-211

◆ I 老舎の死をめぐる聞き書き／II 8月25日 — 死体発見と引き上げ／III 8月25日 — 文聯の対応／IV 8月25日 — 舒乙の場合／V 8月25日 — 夫人胡絮青の場合／VI 事後の調査

\*「本稿は昨年度の本紀要に掲載した「老舎の

死をめぐる断想 — I —」〔☆略〕の続稿である。前稿では中国の文化大革命の初期に自ら命を絶った老舎(1899~1966)の、1966年8月23日という1日について、時系列的に事実をたどり、さまざまな証言を突き合わせて、惨劇の再現を試みるとともに、文化大革命という運動に参加しようとした老舎の姿勢について、考察を試みた。それは人びとの記憶というものの心もとなさを、あらためて確認する作業でもあった。本稿では老舎が水死体で発見された同年8月25日について、同じく関係者の証言を突き合わせて再現を試み、事実の不安定性、記憶の心もとなさについていささか考察する。／本稿で引用ないし参照する基本資料は、ほとんど以下の2点である。／(A) 傅光明『老舎之死 — 採訪実録』(中国広播電視出版社、1999年12月)。／(B) 傅光明・鄭実編『太湖的記憶 — 老舎之死』(海天出版社、2001年7月)。

#### 加藤 徹「時代の波にゆれる京劇 — その歌詞と音楽、そして舞台」

『月刊しにか』第14巻第3号(3月1日)  
p. 66-71

\*「昔の京劇には、人々が思わず口ずさみたくなるような唱段が沢山あった。／例えば清末。時代が行きづまり、亡国の社会不安がたれこめた北京で、民衆はあらそって京劇の歌詞を口ずさんだ。それらは『秦瓊売馬』の秦瓊の「店主東帶過了黃驃馬」云々という唱段であったり、『文昭関』の伍子胥の「過了一天一天」云々という唱段であった。いずれも文字にして読むと他愛ない、粗雑な歌詞である。しかし鼻歌的に口ずさんだだけでドラマのストーリーを思い出し、一瞬、目の前の現実からトリップさせてくれる力をもつ、そんな歌詞である。／これらの京劇の歌詞について、老舎は『出口成章』の中で、要約すると左のようなことを書いている。／—統計はないものの、京劇や地方劇の歌詞を

いくつ口ずさめる人の数は、詩歌の朗誦を好む人よりずっと多いはずだ。例えば「過了一天又一天」等の京劇の歌詞は、私の耳のなかですでに五、六十年も響きつづけている。往年の騷人墨客たちは、自分たちが書いた詩歌の作品が忘却のかなたに消え去り、かえって「過了一天又一天」のような他愛のない歌詞のほうがずっと人々の口のなかで生き続けようとは、夢想だにしなかったろう、云々。(「看寛一点」)／京劇の人気のある唱段は、騷人墨客が意図して書けるものではないのだ。ある唱段がどれほどの人気と生命力をもつか、それを決めるのは大衆と歳月である。どんな京劇演目がヒットするかは、公演の蓋をあけてみるまでわからない。これは、京劇二百年の歴史から得られた経験則である。」(p. 69)

#### 日下恒夫「破鏡「尚未」重圓 — 老舎“The Yellow Storm” 末尾の重訳された中国語への覚え書き —」

『關西大學中國文學會紀要』第24号  
(3月19日) p. 23-42

◇「たしかに〔☆“The Yellow Storm” 末尾13段の〕30数年ぶりの発見は珍事であり、中国語訳への重訳は慶事である。だが「破鏡重圓」というナイーブな団円のことばで総括するのは時期尚早。「破鏡」は中国語重訳の中では発表から20年たったいまなお「重圓」を果していない(p. 40)」ことを詳細に検討する。

\*「一見些細とも見えることばかりを指摘したのは、1982年に行われた「編集」や加工を検討することで、あるいは『四世同堂』の末尾が捨て子にされた理由も見えてくるのではないかと考えたからである。」(〈注12〉p. 42)

#### 洪燭「舌先のカーニバル」

『中国美味礼賛』(阿堅・車前子・洪燭／鈴木博訳、5月10日、青土社) p. 271-448

\*「本書は、阿堅・車前子・洪燭共著の『**中国人的喫**』（中国文聯出版社、二〇〇〇年）の全訳である。ただし、訳出には第二版（二〇〇二年刊行）に対する共著者による自筆訂正本を使用した。／〔☆中略〕／まず、阿堅は、一九五五年生まれの生粋の北京人で、「満洲八旗の遺風を少なからず留める」というから、老舎〔☆略〕と同じようにその末裔かもしれない。〔☆後略〕／車前子は、一九六三年に江蘇の蘇州に生まれ、現在は北京に住む。〔☆後略〕／洪燭は、本名を王軍といい、一九六七年に南京に生まれ、一九八九年に武漢大学を卒業し、北京の中国文聯出版社（つまり、原著書の出版元）に勤務し、現在にいたる。若いときから美食家になるのが夢で、知らぬまに散文家になっていたという。箸を手にしたときは筆を手にしたときと同じように誠実で、筆を手にしたときは箸を手にしたときと同じように奔放であり、美食も好きだが、美女も好きだそうである。」（「訳者あとがき」p. 449）

\*「十年前には、庶民で周作人を知っている人は、魯迅〔☆略〕を知っている人よりもはるかに少なかった。同じように、周作人の苦茶庵はおそらく知識階層のあいだで伝えられているだけであったが、老舎〔☆略〕の茶館〔☆略〕についてはほとんどの人びとに知られていた。それはもはや現実を超越している茶館であり、旧時代の三教九流〔さまざまな職業の人〕が雲集し、手に鳥籠を提げて散歩する遺老遺少〔清朝に忠誠を尽くす老人や若者〕もいたし、各地を渡り歩く説書〔講釈師〕、門付けをする放浪の歌姫、足を休め埃を払う人力車もいた……紙上の茶館はまるで生きている衆生を網羅しているかのようであり、風でさえ吹き倒すことはできない。苦茶庵は個人主義であるが、老舎の描く庶民的な北京の茶館は雅を棄てて俗に就き、自然な状態に戻っている。老舎は北京の茶館を有名にした。老舎も老舎になった。」（〈茶道〉

p. 358）

\*「わたしは酒に親しみを感ずる。さもなければ、なぜこの小文を執筆するであろうか。大風の吹きすさぶ北京城内で、二鍋頭を飲み、聖賢の書を読む——わたしの全青春の忠実な描写である。紅星牌の二鍋頭は、値上げまえは一本がわずかに二円四十銭で、老舎〔☆略〕の小説に出てくる値段と同じであり、それがわたしの印象に残っている北京の庶民の生活であり、わたしの心中の庶民的な北京である。老北京〔生粋の北京人〕は、二鍋頭を飲むのに場所を選ばなければならなかった。古くて低い旧式の四合院〔☆略〕でなければ、世の中が変遷する感じを味わえず、ビルディングや照明の明るい星クラスのホテルで飲めば、味が変わってしまい、態度も明らかにわざとらしくなってしまうのである。わたしが北京で五大本の詩を作ったときに、壁ぎわに山をなした酒の空瓶こそその証にほかならない。酔って長安に臥した、すなわち、酔って長安街〔☆略〕に臥した——わたしは李白の遠い親戚である。二鍋頭は、わたしが家を探す（駱駝祥子〔☆略〕のような人力車夫が手を貸してくれた）のを、詩歌の故郷を探すのを手伝ってくれた。院子に大木が二本あり、一本は棗、もう一本も棗である……二鍋頭は身近に感じられ、武骨であり、ひいては卑俗でさえあり、老車夫の名まえのようである。しかし、わが詩歌にとっては、二鍋頭は西洋派の純粋なレミーマルタンに勝るとも劣らないのである。」（〈酒〉p. 399）

\*「傲膳飯荘は、一九五九年にもとの場所（北海の北岸）から瓊島の漪瀾堂に移り、公園内の特殊な景勝を形成するにいたった。漪瀾堂は、乾隆帝〔☆略〕が文臣に宴を賜ったところである。漪瀾堂で傲膳を食べると、皇帝にさらに一歩近づいた感じがする。この老舗の看板の額は、老舎〔☆略〕が書いたものである。「正紅旗」〔☆略〕のもとで成長した老舎がこの額をした



ためたときには、おそらく特別の味わいがあったであろう。まさに、倣膳自身に特別の滋味があるように。現代の北京は、餐館が林立しているけれども、満漢全席を食べたくなるのは、おそらくこの老舗においてだけであろう。この金文字の看板は打ち壊すことができない。」(『倣膳』 p. 436)

#### 阪口直樹「『救国』と『通俗』の相克」

〔二〇世紀前半の小説〕

(宇野木 洋・松浦恆雄編)

『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』(6月20日、世界思想社)

p. 122-147

\*「いま一つ、三〇年代の代表作品として『駱駝祥子』を取り上げてみよう。この小説は、大恐慌による破産や戦争による混乱という社会的矛盾を背景にしながら、農村青年の祥子が北京で人力車夫となって懸命に働くのだが、ついに絶望と墮落に落ちていく一生を描いた作品である。作品は一見、老舎が熟知している社会の底辺に生きる人々の喜怒哀楽、生と死のありさまをありのままに描いているが、その構成と描写は、彼がイギリス留学〔★ママ〕時代に学んだ西欧近代的手法であり、単に祥子の悲劇を通して底辺の貧困と社会的混乱を描いたというよりも、むしろ金銭、資本、投資、身体といった近代社会と直結した要素に関心が向いていたともいえるのである。そもそも人力車夫は当時の社会においては、現在のタクシーにあたる近代的な交通手段であったともいえ、だから老舎は、将来は近代的な労働者・経営者へと移行すべき若者が、結局は国家の混乱と矛盾の中で滅亡に至る『個人の奮闘』を描いたのだと考えるべきではないだろうか。」(p. 131)

\*「しかし私はこの作品における女性の描写には、これまでの新文学には見られない特徴があるように思う。ひとりには妻の虎妞、もうひとり

は死の直前に愛した小福子であるが、祥子の生涯をめぐるこの二人の女性に対する描写はきわめて対照的なのである。〔☆後略〕／虎妞は、人力車屋の父親を助け、恋愛の自由を自力で実現してしまい、難産によって死に至るという積極的な女性であり、これに対して小福子の方は、優しいが、運命にさからえない、消極的で受け身の生き方をする女性である。だが老舎は、虎妞を醜く性格の悪い女性として描き、小福子を情の深い女性として同情的に描いているのである。五四時期の文学は、『積極と激しさ』『消極と優しさ』という対立的な女性像に対して、前者を近代的進歩的な女性像として肯定的に、また後者を伝統的保守的な女性像として否定的にとらえる傾向が強かったが、老舎はむしろ祥子の立場や感情に沿った表現を重視し、読者の生活感覚や感情レベルを意識していたことがよくわかるだろう。この意味でも老舎の小説は、観念的高踏的な小説から、新しい『通俗』へ飛躍したのだということができよう。」(p. 132)

#### 戸川芳朗「わたくしの中国学」〔人と学問〕

工藤先生の読解法に学ぶ

『中国—社会と文化』(中国社会文化学会)

第18号(6月30日) p. 220-245

\*それで、工藤〔☆篁〕さんが教養語学として中国語を教えるに当たり、ドイツ語なら論理性とか哲学の匂いを感じさせる言語として、フランス語ならボン・サンス、英語ならインターナショナルな言語としてというようなことがあるなかで、いったい中国語の何が『教養』と呼ぶに値するのかという点から出発されたわけです。で、魯迅しかないじゃないかということになるんです。われわれがドイツ語やフランス語を棄てて中国語をやるのは、魯迅の苦悩を共有するため以外にはないということですか。魯迅の読みにくいことはご存じのとおり。それに

挑戦していったのが、丸山昇さんをはじめ、Eクラス出身の人たちです。〔☆後略〕／そして、そうやって魯迅をやる一方で、もう一方の柱は老舎でして、語学的な関心からは老舎をやるのがあたりまえでした。巴金や郭沫若では卒論にならんと聞かされました。駒場での工藤さんの授業も、『駱駝祥子』を読んだ。その冒頭の「我們所要介紹的是祥子、不是駱駝」を読むのにも、「所」とは何、「要」とは何、「的」とは何と、事細かに追求するわけです。工藤さんの、いわゆる断章取義ならぬ“断字取義的三行主義”ですね。これによって私は、「なるほど、本というのはこのように読むものなのか」と学んだんです。後に私は京都大学の大学院に学ぶことになるんですが、京都シナ学の学問の特徴として、文献を厳密に読むことが強調されますが、私はあらためて驚くということはありませんでした。すでに工藤さんの特訓を受けていたからです。〔☆後略〕／工藤さんは、老舎の原作を焦菊隠がシナリオに仕立てた『龍鬚溝（排演本）』を詳しく読まれました。それは大学の授業ではなく、倉石講習会でのことですが、もう私は卒論作成の年に入っておったと思います。排演本というのは、今でもわかりにくい、たくさん“土語”が出てまいります、それを一つ一つカードにとっては、引揚者とか中華料理屋の主人なんかきいて、読まれたんです。それで、私どもは、駒場の研究室でその“カードポーター”をやっておったんですが、そのおかげで卒論“可”についてができたんです。『龍鬚溝（排演本）』を中心に、間投詞ふうの副詞“可”の用法を分析したものでして、その成果は、倉石さんの『岩波中国語辞典』の“可”のところに、入っております。（p. 227）

森本まみ子『北京ごはんを文豪といかが — 食でたどる老舎小説 — 』

（6月30日、溪州舎、157頁、頒価1600円）

◆はじめに／目次／老舎とごはん／窩窩頭／焼餅／涮羊肉／うどん／粽子／饅頭／老舎という人／参考資料／引用した日本語訳表記の老舎著作現代◇カット：森本泰平

\*「以下、老舎の作品に表され、それを作中から書き出した千余枚の食べ物のカードのなかから、つぎの庶民の「北京ごはん」を七つ取りあげて、老舎の北京から今の新北京まで、くるくる巡ってみたいと思います。」（p. 22）

【2003 年下半期】

『老舎研究会会報』第 17 号（8 月 1 日）

◆日下恒夫「老舎研究会の生まれる少し前」  
p. 1／布施直子「国際老舎学術研討会に参加して」p. 2-3／平松圭子「老舎と呉祖光、新鳳霞夫妻」p. 3-4／倉橋幸彦編「老舎関係文献略目（6）」p. 4-10：【1999 年・補正】【2000 年・補】【2001 年〈上半期〉・補】【補・2001 年再録】【2002 年〈上半期〉】／辛彦「“補白”老舎」p. 10-12／「事務局便り」p. 12

加藤千洋「胡同に住む人びと」

『胡同の記憶 — 北京夢華録』

（10月22日、平凡社、p. 31-42）

\*「その豊富胡同に入った左手すぐが作家、老舎が死去するまで十数年を暮らした旧居である。北京の庶民の暮らしぶりをユーモアと哀感のこもった目で書きつづった。彼ほど北京を愛した作家はいないだろうと言われる。／遺族が明け渡し、手入れが終わって記念館として一般公開されるようになったのが一九九九年二月のこと。ちょうど生誕百周年に当たった。私も早速訪ねたが、規模はさほど大きくはないが四合院形式の平屋建物で、中庭を囲むように建物が配置されている。その庭には丁香や海棠、菊などが植わっている。季節ごとに咲く花は老舎自身が育てたものだそうだが、画家として有名

な胡潔青夫人の画材にもなったのだろう。／ほかに柿の大木が二本。この木にちなみ老舎の住まいは「丹柿小院」と呼ばれている。書齋、寝室はそのまに展示され、ほかの建物では生い立ちや、日本占領時の北京の四合院に住む大家族を描いた大作『四世同堂』や、車引きを主人公にした『駱駝祥子』など代表作の書かれた背景などが紹介されていた。／老舎の無残な死体が市内北部の太平湖で発見されたのは一九六六年八月二十五日のこと。同年、文化大革命が始まって間もなく、老舎は批判され、紅衛兵のつるし上げの場に引き出され、体中にあざが残る暴行を受けた。そして一人で家を出て帰らぬ人となった。文革の狂気に対する抗議の自殺とされるが、自ら入水したものかどうかも含め、その死にはなぞが残されている。／意外な話がある。中国映画界の新世代を代表する陳凱歌監督が青春時代を回顧した『私の紅衛兵時代』（講談社現代新書）はとても好きな本だが、そこに次のようなエピソードが紹介されている。／一九六六年八月二十四日昼（すなわち文革が開始されて以後のことである）、陳凱歌は太平湖の湖畔を歩いていて、偶然にも老舎と出会っている。太平湖は陳の自宅から近く、とても静かな所だったので、よく散歩に訪れていたそうだ。その日は友人と一緒にいた。公園といっても植木の手入れもされていないため、人影はほとんどない。老舎（陳と面識はない）が歩いてきたとき、ちょっとおかしい老人だと思っただけだったという。少し足を引きずっていた。顔もやや腫れていたようだが、陳たちのことを気にとめていないようだった。／「おい、いまのは老舎じゃないか」。気づいたのは友人の方だった。「まさか。似てないよ」と答えたのは陳だったが、彼は前日に起きたつるし上げ事件のことは、まったく知らなかったという。／すべてを知った後の陳凱歌は、北京に生まれ、北京をこよなく愛し、この都を描き続けた作家の胸の内をこう

解釈している。／「老舎は同じような暴力をふるわれる場面を描いたことがあるが、皮ベルトや角材が、この自尊心の強い文人本人に見舞われたとき、彼が作品で繰り返し描いてきた『北京人の誇り』がバラバラに砕け散ったのだろう」〔☆刈間文俊訳『私の紅衛兵時代 — ある映画監督の青春』〔講談社現代新書1008〕1990年6月15日、p. 143。なお、陳凱歌の同書については、日下恒夫・倉橋幸彦編『近十年来日本老舎研究簡介』（1992年8月23日）に所収。〕（p. 34）

◇カット写真：「老舎記念館」（p. 35）

\*「〔☆前略〕、老舎の旧居を辞し、そのまま細い路地の豊富胡同を奥へと歩む。ふと右手に続く塀が気になる。視線を上に向けると、なんと塀の上から見下ろす男がいるではないか。ニキビ面で、軍服を着た兵士である。しっかり目と目があってしまった。／そう、この大きな屋敷は普通の市民の住まいではない。豊富胡同が敷地の西端で、東側は富強胡同に面し、そちらに正門がある。つまり二本の胡同にまたがるかなりの広さの屋敷だ。／いつもピタリと閉ざされた朱塗りの門の奥に住むのは、趙紫陽である。」（p. 37）

\*「北京をこよなく愛した作家の旧居と失脚した元指導者の住まいが、同じ町内、しかも隣組というのも不思議な気がする。」（p. 39）

◇なお、加藤千洋の同書には、他にも老舎に言及する箇所がある。

\*「北京の茶館といえば、多くの人が老舎の傑作『茶館』の風景を思い浮かべる。さまざまな階層の客がより集い、朝から晩まで一杯の茶を喫しての談論風発がとどまるところを知らない。店内にはさりげなく「莫談国事」（国事を語ることなかれ）の張り紙。現代の紫藤廬〔☆「故宮のすぐ西側を南北に走る南長街」にある茶館〕の柱には、ほかのお客様にご迷惑にならないようにと「軽声細語」の注意書きがあった。」（「碧螺春で一服」p. 136、「『茶館』の舞台」

カット一幅)

\*「この二人を結びつけたのは、作家の老舎だったそうだ。華北地方の地方劇だった評劇は、北京では京劇より地位が一段低い芸能と見なされていた。だが無類の芝居好きの老舎は新鳳霞の芸の魅力を真っ当に評価し、呉祖光に「天橋に素晴らしい女優がいるぞ」と教えたのだという。／新鳳霞は学校に通えなかったため、文字をおぼえる機会がなかった。ある時、雑誌社から原稿の執筆を依頼されたが、困り果てて相談相手の老舎のところに駆け込んだところ、それなら呉祖光に手伝ってもらえばいいと助言され、それをきっかけに二人の付き合いが始まった。／革命後間もない五〇年代の北京の演劇界には思想の対立が渦巻いていた。主流派は革命根拠地の延安で活躍した人びとで、ほかに国民党支配地区で演劇改革に取り組んできたグループがおり、呉祖光のような国外からの帰国組は異端と見る空気があった。それ故にスター女優と呉祖光の結婚を快く思わず、異議を唱える人びともいたのである。／しかし呉祖光の才能を認めていた周恩来は結婚を支持した。結婚後間もなく、二人を老舎夫妻らとともに中南海の自邸、西花庁に招いて宴席を設けたという。」  
(「呉祖光が逝った」 p. 199)

#### 横尾忠則「いつもそばに本が(中)」

『朝日新聞』10月26日、11版読書

\*「二十歳で今の妻と神戸で同棲生活を始めた。／そのころ彼女は三島由紀夫の『金閣寺』を持っていた。会社から借りて来た本だ。少年小説の江戸川乱歩と南洋一郎しか読んだことのないぼくには、三島由紀夫は驚異だった。なぜなら、彼女を理解するには三島を知らなければならぬ。何と重いプレッシャーであったことか。そして『金閣寺』は、僕にとって初めての大人の小説だった。／結婚して四十七年にもなるが、読書家のはずの妻がその間に読んだ本は有吉

佐和子の『複合汚染』と老舎の『駱駝祥子』の二冊だけ。彼女は『金閣寺』も読まなかった。」

### 事務局便り

◇2004年度大会は7月31日〔金〕に、前号の「事務局便り」でも報告させていただいたように、「口述歴史」という方法でもって老舎の死を丹念に調査したことで知られる傅光明先生（中国現代文学館）を研究会単独で北京からお迎えし、関西大学文学部第3会議室で開催されました。傅先生は、関西に三日逗留された後、東京にも一週間余滞在されました。その間、会員をはじめ多くの方々に御協力いただき、この場を借りてお礼を申し上げます。

◇当日の発表者とテーマは次の通りです。

〈特別公演〉

傅光明：對老舎之死的調查與研究

〈研究発表〉

吉田世志子：老舎『猫城記』—早く来すぎた小説—

池田智恵：老舎『離婚』と30年代の武俠小説ブームについて

◇次号は区切りの20号ですので、記念号の発行を予定しております。老舎や老舎の作品に関連するエッセイ、論文、書評など、会員各位の投稿をお待ちしています。奮ってご投稿下さい。

◇今号の編集、印刷についても、好文出版には例年の如くご無理をお願いし、感謝とお詫びを申し上げます。

**老舎研究会会報第19号** (2005年8月5日)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

関西大学中国語中国文学(日下)研究室

老舎研究会事務局

TEL : 06-6368-1121 (代表)

